未来への航路

宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長　平川 新（ひらかわ あらた）

⑮奥州の地震と津波2

13世紀の巨大津波

前回示した地震年表3番目の1200年代の地震は、今年5月に東北大学災害科学国際研究所の菅原大助准教授が発表したばかりの研究成果です。仙台市宮城野区蒲生にあった仙台藩の御蔵場跡付近を発掘調査した結果、この時期の津波堆積物が発見されたのでした。

仙台藩は1670年代に、塩釜湾と七北田川河口をつなぐ8㌔の堀を掘削しました。これが御舟入堀です。結節点の蒲生に船溜りと米蔵を設けて御蔵場としました。御舟入堀が開通したことから、七北田川の上流地域から年貢米や諸産物が蒲生まで運ばれ、そこから御舟入堀を経て塩釜港に送られました。石巻・塩釜方面から仙台城下に向かう物資も、この逆ルートで送られました。

蒲生は2011年の大津波で浸水したので非可住地域となり、業務用団地として区画整理事業が実施されました。そのとき御蔵場跡の発掘が行われ、地層調査の結果、過去三回の津波堆積物が見つかりました。放射性炭素を測定した結果、1545年と1611年、それに今回初めて確認された1200年代の津波堆積物だったのです。

仙台市内の別な地点からもほぼ同じ時期の堆積物が見つかっていますので、当時の海岸線や浸水範囲などから、研究チームはマグニチュード8程度の津波があったと推定しました。残念ながら文献記録がありませんので、津波発生の年代は特定できていません。

この津波の層が発見される前は、869年の貞観津波の次は1454年の享徳津波だと考えられていたのですが、1200年代の津波が発見されたことから、巨大津波の発生間隔が約600年から400年へと短くなりました。津波頻度が高くなったということは、今後の防災対策にも影響を及ぼすことになります。

「津波」という言葉の初見

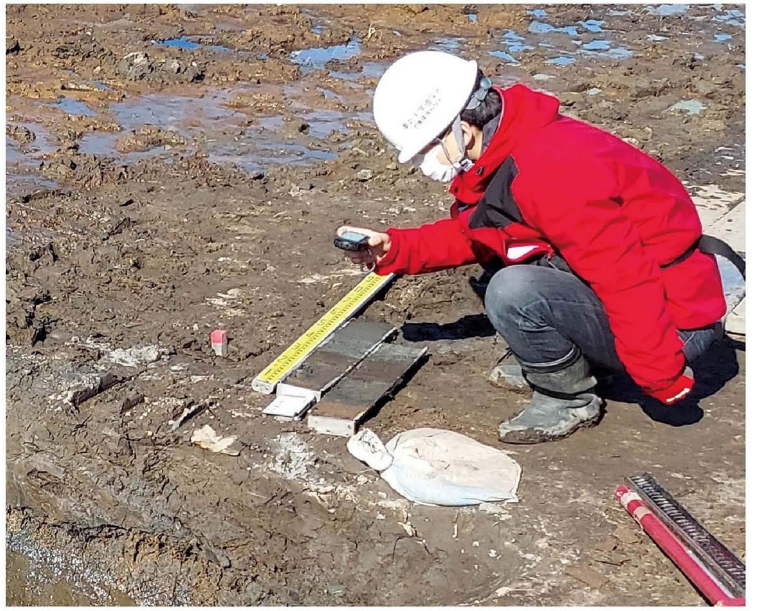
4番目の享徳津波のことは、1524年頃に成立した「王代記」に記事がありました。甲斐国（現山梨県）の普賢寺の住職が代々書き継いだ記録で、享徳3（1454）年11月23日の条に「夜半ニ天地震動、奥州ニ津浪打テ、百里山ノ奥ニ入テ、人多海ニ入テ死」とあります。奥州に津波が襲来し、百里先の山の奥まで浸水して多くの人が海に流されて死んだという内容です。

百里は390㌔になりますが、実際の距離ではなく、内陸の奥深くまで津波が入ったという意味です。奥州で発生した大津波の情報が、遠く離れた甲斐国まで伝えられていますので、百里という大げさな数字になっていったのでしょう。

この記録には、もう一つ重要な記事があります。それは「津浪」という言葉です。これが津波という言葉のもっとも古い記録だとされています。

では、それ以前はどんな言葉が使われていたのでしょうか。古記録には、「大潮」や「大波」「大波浪」などとあります。それがなぜ津波になったのか、まだ解明されていません。津とは船が集まる湊のことですから、交通の拠点である湊がやられたということが強調されて津波になったのかもしれません。江戸時代には津波の用語が一般的になりました。現代では、〝Tsunami〟という言葉は、国際語になっています。日本では津波が多いということと、最先端の〝Tsunami〟研究が日本から発信されているからなのです。

発掘された蒲生御蔵場跡の石積み
（仙台市文化財調査報告書『貞山堀・蒲生御蔵跡』2018年）



ジオスライサーによる地層の掘削と観察の状況
（東北大学災害科学国際研究所菅原大助准教授提供）

ひらかわ・あらた
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26―31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。